

【大会趣旨文】

「ポストヒューマン」という概念が、20世紀テクノロジーによる人間機能の拡張から、文化人類学や新しいエコロジーなどの多様な領域に関わるものとして、厳密な定義を持たないまま広く流通するようになって久しい。そこでは、旧来の人文諸学における人間中心主義を相対化し、また「人間」をテクノロジーや環境を含めた「非人間」との関わりにおいて捉え直すことが試みられていると言えるだろう。

一方で、ある存在を非人間と見なすことを批判することには、別の境界を産出するジレンマが付きまとう。例えば、昨今の重要な論点である動物に対する着目には、非人間化される動物（表象）を問題化する功績の反面、植物や菌類、無機物などを議論から排除する側面があるのではないだろうか。

また、注意しなければならないのは、非／人間の境界を取り払おうという態度が、人間の名の下にあらゆるものを包摂する、全体主義的な差異の排除であってはならないということである。

ここで文学に目をむけてみれば、ポストヒューマンの概念成立以前から、実に様々な植物や無機物と人間（人体）の交錯が描かれていることに気付く。例えば、植物は、言葉を発しない性質が言語システムの支配からの自由を、動かないゆえに発達させた根の驚異の機能が生命力を、多様な雌雄性が生殖からの自由を、人間に蝕知させる一、人間は植物を羨望し、植物を模倣し、植物に変身し、やがて植物にとって換わられる。また、人間は健康・長寿への欲望から多種多様な菌類を利活用し体内に取り込む一方で、不可視の細菌・ウイルスに侵食され死に至ることもある。他方、生を脅かすものへの抵抗はテクノロジーへの探究心へと形を変え、人間と機械の境界はいよいよ曖昧になり、人間は機械との接続によって息を吹き返し、その制御によって延命する。さらに、都市を「自己増殖する自然」（日野啓三『都市という新しい自然』）と捉えると、そこには廃墟のロマンティズムを包摂し、超克しながら、「人間」と無機的なものの関係性を再構築するさまが看取され、人間の手で構築された都市＝自然が、「人間」と「非人間」の臨界を脅かす。

このように文学において人間と植物／無機物の関係は、相互に嵌入するような複雑な形態や身体性を持っている。これは、非／人間の境界の問い直し方そのものを再考させるような、言語による思考実験の過程といえるのではないだろうか。

文学は常に、人間の身体が固定的なものではなく、植物／無機物によって崩され、保たれ、共存し、殺される様子を描き出してきた。この企画では、西欧キリスト教文化圏における人文科学を通過した上での近現代日本の文学が描き出す植物や無機物の表現と、それらが持ちうる潜勢力を、ポストヒューマン（という用語の批判も含めて）の観点から検討する。

5.25²⁰²⁴ [土] 13:00~ 会場:3-207教場

《開会の辞》中野達哉

《特集》〈非／人間〉の臨界——交錯する表現の潜勢力

山根直子 尾崎翠「小野町子もの」における〈変態〉——植物との交錯を通して——

藤井貴志 〈人間〉の後に到来するものは何か——埴谷雄高の滅亡愛——

芳賀浩一 「人新世文学」の風景——日野啓三『夢の島』を題材に——

小澤京子 人間と／人間の廃墟化——一九〇年代から一九八〇年代の日本を中心に——

《総会》

《懇親会》

5.26²⁰²⁴ [日] 10:30~

《研究発表》

〔個人発表〕第一会場 3-305 教場

木下響子 〈父の娘〉の物語——吉屋信子『地の果まで』——

佐野日菜子 谷崎潤一郎文学とホモセクシュアリティ

芹澤凜香 谷崎潤一郎「魔術師」における世紀末芸術からの影響について

西野厚志 文学と映画の〈Mal-Adaptation（不・適応=悪・翻案）〉
——谷崎潤一郎「痴人の愛」とそのアダプテーション（視覚化）の展開——

清水智史 谷崎潤一郎「細雪」論——観光を視座として——

〔個人発表〕第二会場 3-311 教場

市川裕見子 『鼻』『明るみ』の方へ——ベルクソンの考察と仏教思想とをめぐって——

林悦 芥川龍之介「湖南の扇」論——黄愛と黄六一の関連性を手がかりとして——

スポーレ・マーシャ 東歌と〈琉球〉が重なり合うとき——折口信夫の万葉集注釈と詩歌に現れる沖縄像——

牧千夏 宮沢賢治作品における知覚表現の特徴

金井雅弥 宇野浩二「蔵の中」と落語

勝倉明以 織田作之助「清楚」論——草稿の分析を中心に——

〔個人発表〕第三会場 3-312 教場

石井要 動物文学再考——人間が描く「動物」とは何か——

Cima Igor 八〇年代の日本文学と〈三島由紀夫〉——島田雅彦『僕は模造人間』を中心に——

《パネル発表》

亀有碧、西岡宇行、松田樹、峰尾俊彦、山西将矢、（ディスカッサント）今井亮一

九〇年前後、未了の日本文学——冷戦体制とグローバリズムのはざままで

《閉会の辞》久米依子

二〇二四年度
日本近代文学会春季大会

《特集》

非／人間の臨界

交錯する表現の潜勢力